

昭和二十四年七月二十三日
昭和四十五年九月十五日
第三種郵便物認可
發行（毎月一回・十五日發行）

（通第二五六号）

慈光

第二十二卷

第九号

次

宗教心は健全なる常識なり……………近角常観……………(1)

七里恒順師見舞文……………七里和上語録……………(5)

住田智見師聞書……………中島彰悟……………(8)

目
歌集「白蓮」抄……………筑紫野春草……………(13)

本願成就文(三)……………花田正夫……………(17)

宗教心は最も健全なる

常識に外ならず

近 角 常 観

宗教心とか、宗教意識とか名づくるときは、常識以外の精神作用であるかの如く考ふる習慣がある。これがそもそも根本的に誤謬（ごびゆう）である。故に信仰とか宗教とかいうときは世人はたちまち常規を逸したものと考へてゐる。何か神靈なる、むしろ奇怪なる精神現象であると予定してゐる。いわゆる廓然大悟（かくねんたいご）とか、信心廻向とか、インスピレーションとかいえる言語にはおのずからいふべからざる高尚の精神状態であることを現わすと共に、常識をもつて測るべからざる精神状態である、という思想を運んで来る。特に燃ゆるが如き信仰とか、狂気の如き熱情といへば、むしろ常識以外でなくてはならぬということとは、信仰状態の一要件であるかの如く考へらる。そこで熱心に信仰を求めるときは、通常では満足出来ぬ。出来るものなれば不思議な目に遇つてみたい、奇蹟でも夢みたいという様な妄想を抱くようになる。それ故、世人は

所謂宗教心をもつて病的であるというようになるが、ただに世人が言うのみではなく、信者自身も病的な様な状態におちいらねば、宗教意識と言われぬものと思へてくる。つまり精神を一点に集注して、他をかえりみず、狂気の如く、炎の如くならざれば、真実の信仰とは言われぬと考へる。これを要するに常識を離れたものならざるべからずと考へることになる。

はたして信仰が此の如きものならば、すこぶる不健全なものである。私は考ふるに、宗教心なるものは此の如き奇怪なものではない。むしろ、最も健全なる常識に外ならずと思う。全体宗教をもつて神聖なるものと思へることはよけれども、その極、遂に人間の企て及ぶべからざるもののように考へるのは、非常な過失である。もしはたして人間の企て及ぶべからざるものならば、それは宗教ではない。そも／＼すでに宗教といへば仏と人との融和を意味する

ものである。すでに仏と人との融和なれば、人としてその常識に訴へ、人としてその性質にかなうものでなくてはならぬ。もし常規を逸し、常識を脱するものならば、それは吾人人生界の上に存する宗教とは名づけられぬ。もし常識を逸したるときは、或は超越的であると思へることも出来る。然れどもその超越なるものが、人間というものを標準として考へるときは、常人としての性質を逸したるものにして、いわゆる病的と言わねばならぬ。

私は考ふるに、宗教は人間の人間たる真髓を現わしたるものである。したがって所謂宗教心なるものは吾人の常識がもつとも健全に発達したものである。即ち各自その宗教意識を自省してみるに、たとえ如何なる様子に現われていても、決して常識を脱するものではない。むしろ常識としてもっとも健全なるものにして、宗教心なるものは模範的の常識である。したがって宗教なるものは模範的の人間界を現わしたるものである。常規を逸したるが宗教の一要件にあらずして、むしろ常規を逸せぬということが一要件である。これが人間として仏陀に融合したる味である。

然るに、宗教上において開宗者の伝記を見るに、ほとんど常識以外の事蹟が現われている。釈尊が老、病、死をみて非常の感を起され、太子の位に在りながら夜に乘じて、王宮を遁れ、山に入られたるとき、如何にも常識をもつ

て想像すべからざることである。ルーテルが野外を逍遙していて突然に同行の友人が電光のために打たれた時、天の起せる恐怖により法科大学在学中でありながら、早速寺院に入り僧侶となり、非常な憂鬱に沈んで懺悔を事としたるが如き、決して通常ではない。されど、此等はいずれも最も真摯なる行為にして、即ち自己が感じたとき、忽ち行為に現われて、その間一髪を容るるの余地がないのである。

而して釈尊が所謂六年の間、諸種の宗教的経験を積み重ねられた時、その心中はすこぶる苦悶されたものとみえる。その精神界裡の煩悶の様子は、これまたたしかに常識をもつて推すべからざる有様である。釈尊とアララと問答の折アララが哲学的論議を弄して、釈尊に対して抗弁的（こうべんてき）態度をとりたるとき、釈尊の答えられるには

「我はわが心中の苦悩を解脱せんがために遠く来りて教を請うのである。あたかも病人の医療を求むるごとく切なるものがある。左様な戯論（けろん）をなすためではない」

とて、即座に袖を振って去られた。実に信仰の問題について議論的態度をとるもののためには拳々服膺（けん／＼ふくよう）すべき訓戒である。さてこの苦悶の最後に、遂に精神的の妄想、すなわち悪魔を剿絶（そうぜつ）して所

謂廓然大悟の樂境に達せられたのである。この安心の地に達せんとする前驅として、非常な精神上の苦悶がある。これを若し平生修々閑々として、戯論をして、呑気にしている者の目より見るときは、如何にも狂気の如くあるのである。常識を逸したる行動の如く見ゆるのである。この苦悶が中々通常でないのである。釈尊が自ら病者が医療を求むる如くと形容されたは如何にも適切な形容である。されど、全くこれは眞摯なる人ならば、かくならざるべからざる道理にして、所謂、頭燃を払うが如く一刻も猶予する余裕がある筈がない。されど決して常規を逸したる意識ではない。ことに宗教心と称すべき点はこの煩悶でない。この煩悶を脱し来りてのち、從容迫らざる広廓（こうかく）な精神界である。この境にいたりてこの胸中に起れる宗教意識なるものは、毫も常識と異なるものでない。むしろ最も健全なる常識にして、人間意識の標本とでも称すべきものである。

しかしこの苦悶の時の意識については、大いに注意すべきである。動もすれば、ほとんど常識以外に逸したかの如くみえる人がある。マホメットやスウィーデンボルグの如きはすこぶる怪しい。今日にても、宗教心より遂に罪惡妄想におちいり、或は種々の迷信を抱く人がある、これは最も注意すべき点である。この苦悶の時、常識を逸してはな

識であると考え。

随分、宗教上において世間道德、出世間道德とか、或は眞諦とか俗諦とか称することがあって、世人が道德心と宗教心とは異りたる意識である如く考える人があるが、これは大なる誤謬である。私が考えるには、唯一の健全なる常識であつて、人と人との間柄なれば道德心と名付け、人と仏との間柄なれば宗教心と名付けるまでのことである。仏に向つて懺悔するが、他人に対しては高慢になり、仏に対して感謝する人が、他人に対して感謝の念のない筈はないこれを別物のように考え、即ち宗教心を以て常識以外のこのように思っているのは大なる過失である。

（信仰全歴より）

徒然草（百八段）

寸陰をおしむ人なし。これよくしれるか、おろかなるか、おろかにしておこたる人のためにいはば、一錢輕しいといども、是をかさぬれば、まずしき人をとめる人となす。されば商人（あきびと）の一錢をおしむ心切なり。刹那覺えずといえども、これをほこびてやまざれば、命を終る期（こ）たちまちにいたる。

されば道人は、とおく日月を惜しむべからず、ただ今の一念、むなしく過じる事を惜しむべし。

らぬ。すでにこの苦悶の時常識を逸せずして、鍛え上げたるものゆえ、その結果は健全なる常識としてあらわれるのである。各自らその経験に徴して省みるがよい。私が最もうれしいのは、自分の欠点あることを自覺する意識を生ずるようになったことである。而して時には得意になることがあるが、忽ち自己の欠点が頭をもたげて来るがために、高慢の心を碎かるる。ここにおいて自ら慚愧の心が起り、他人の欠点は左程目につかぬ。ことに自己の怠慢なる、自己の冷酷なることを感ずれば、仏陀の寛大なる慈悲、深き心がひとしお感ぜられ、即ち感謝の念が起る。感謝の念が起つてみれば安閑としていられぬ。出来るだけ同胞のために尽さねばならぬ、宗教のため尽さねばならぬという心になつて眞剣になる。ところが、中々心に思ふばかりで實際は尽くされぬ。少々位は善をなしても實際は爲したと称する程のことではないのである。此の如き心が私の現今の宗教意識の有様である。頗る微弱なるものであるが、自己の惡を惡と自覺することが出来、自己の善を善と思ふ心のすくなくなつたは只事でない、と考えている。細々ながらも慚愧と感謝で日送りが出来る。しかもこれらの心が毫も常識を逸したとは感ぜぬ。私はおよそ半ヶ年以上も病のため精神上に苦悶を感じたことがあつたが、現時の宗教心は当時の如き熱狂の分子はすこしもい、とにかく健全なる常

図書紹介

人生隨想

柳瀬留治

定価、五百円、振替東京一三一五一五。

發行所、東京都新宿区納戸町五、洋々社。

（はしがき）本書は私の、折にふれて書いた隨想を輯めたもので、自身の体験から、人生にどう徹して生きるかの問いに答えたものである。

私は貧しい農家に生れ、体も心も弱く、どう生きて行くかに悩んだ末、宗教による精神的支えがないと立てないと思つた。二十歳頃、たまたま清沢満之師の「精神主義」を読み、且つ近角常観先生の「人生と信仰」を読み、自身さえ立てば生き得る自信をもち、上京して近角先生の教えを乞うた。そして苦悶七年、初めて先生の説かれる信心に醒めた。それから私の人生の發足である。仕事に身を打込み、勉強も出来、好きな作歌も、はては命がけの登山も出来るようになった。

私の信念は、人生にも芸術にもからみ合つて現れるが、前篇に人生を主とし、中篇は芸術的色合のもの、後篇は宗教信仰の吐露を目して編んだ。

著者。

七里恒順師の見舞文

(一)

(註)筑前の名島村の長幼郎氏はすこぶる気概に富み、維新前には西郷南州、平野次郎、轟尤平などの志士と結託して大いに奔走した人であるが、のち仏門に帰し、深く七里和上をお慕いしていた。この人の臨終一日前に和上より送られたる書簡を、和上の言行録より頂く。

病苦さだめてしのびがたくあらせらるべくと推し候えども、しばらくの事に候えば、御耐忍なさるべく候。

病床中、生れてよりこのかた今日までの所業(しわざ)を追想するも無益なり。榮辱(よしあし)はひとり滅して昨夢の如くあとなし。罪業は願力に消されて淡雪(あわゆき)の如くかたちなし。念じて用なければ、捨てて問うべからず。

いのちは、はや一瞬にせまれば、浄土は一紙の外(ほか)よりも近し。唯願力の不思議を仰いでよろこびたまうべし、今にも大悲の尊体を拝し奉るを喜ぶべし。

初めて生ずる時

弥陀諸仏子に告げて曰く

△諸仏子、即貴君のこと△

極樂は彼の三界といずれぞ △彼三界、迷の世のこと△

新往の化生者、ともに答えんと欲し

合掌、悲咽、言うことあたわず
さぞ／＼おたのしみあるべく、拙者も後より参り候間、半座を分けて待ちたまうべし。

(二)

(註)連谷貞成氏が死の数日前に、和上の送られた書簡。
時に明治二十四年五月三日、和上が京都から帰着せられ六月一日に送られたもの。この訓誡には病人もいたく感泣せられたと伝えらる。

貴兄御病氣も存外御重症の趣きうけたまわりおよび、過日在京の日、両三の同志とはかり、御病床、御伺状を發し候ところ、すみやかに令嗣常溪君より御返信をうけ、且つ御病氣も追々輕快に趣き候かと推測いたし居り候ところ、近頃の書信によれば、旧患いまだ退かざるに新病おそい來り候由、さて／＼有漏難染(うろそうぜん)の世界と申しながら、忍むべきの境遇、傍觀なおたえ難きの感やまずその衝(しよう)にあたらせられ候ては御困迫遙察奉り候

維摩經に、舍仏の眼にはこの娑婆世界は、瓦礫荆棘(がれきけいさく) (瓦や小石や、とげのあるいばら) とうつり、螺髻梵王の眼には、唯天人常に充滿せるを見る。
(一水四見で) 家と火と、瑠璃と水とは、ひとえに見る者の不同による。所見そのものに固定の性有るに非ず。人の病患もまたこの原理に外ならんや。

維摩居士は病患を借りて大衆に真理を示し、古の念仏の行者は「病患を得てひとえにこれを喜ぶ」という。

貴兄、近況いかに送光あらせられ候や。往生時々に貴兄の心中を想像するにつき、ひとことならず、自己の將來をも仮想して、また仏恩の良縁ともいたし居り候。

たとい、ひとえに病縁をよろこぶあたわず、或は肉体の痛苦に堪えがたきにもせよ、寒氣極つて陽氣を發するが如く、病苦中に愛法の喜びを生じて法悦を覺ゆるに非ずや。法味を樂しむの心は信心相続の本性なり。苦痛を感ずるの情は月夜の行雲のみ。病はおそい来るも、この病、病魔に非ず、貴兄の喜樂を促すの良縁なり。この良縁を得て往生することは、古の行者に恥じざるの心ならずや。

四隣有縁の人は定めて疾を問うて床辺にいたるあらむ。貴兄、荆棘のとき苦業中に、なお歡喜相続の桜花の盛んなるを見ては、おそらくは、法の威力の不可思議なるを信するの心を増進すべし。不言の中に有縁の人を開示すると、維摩居士の化導にひとしきに非ずや。

されど余は病苦を忘れて歡喜すべしとは忠告せず、病苦煩悶の中に自由随意の歡喜をうしなわざらんことを忠告するのみ。

因縁いまだ熟さずして、貴兄聖道の修行をなさんか。こ

の際なお持戒、禪定をなすの力ありや。三愛の境に不動の堅心ありや。おそらくは分にあらざるべし。
もしまた自力願生の行者たらんか。この病を意に介せずして正念修行することを得るやいかん。
かく言えばとて目今、兄は病に侵(おか)されて正念なしと云うにはあらず、正念は求むるに失して、求めざるに得るものなり。大事を衰弱の身に負担すれば、精神これがために錯乱し、大事を仏力に一任すれば、身心これによりて安んじ、今の正念は仏願のたまものなること明瞭なるにあらずや。

ただに、正念の正念の歡喜するのみならず、よろこびは古の行者にゆずらず、化は仏御在世中の維摩居士に似て、苦中樂を生じ、樂中苦におかされず、念々に安養の素懷を期すること、あに愉快ならずや。

往生、病床下のおもいをなしていささか所懷を呈す。貴兄幸に涵養したまわば、何の幸福かこれにしかん。全快の再会を約するとも破ることあらんも、期してたがわざるは蓮華台上、俱会一処の楽しみなり。

明治二十四年六月一日

七里恒順 拜

蓮谷靖 様

(三)

(註)西秋谷先生は小倉藩の儒者、深く和上に帰依して、しばしば訪問して化導に浴し、法悦三昧に入れるが、明治二十四年の冬

より病氣にかかり、翌年にかけて次第に重りゆく模様なれば、和上の贈られし見舞文。

さて旧臘は非常の寒氣、貴兄も御病氣の御趣、うけたまわり驚き入り候。しかしながら御病床も、無量光明中に候えば、さだめて病苦の中にも法樂あらせらるべくと推察し奉り候。

かねて御聴聞の通り「若^{にや}不生者」の願力は、不^ふ虚^この重願に候えば、往生の大事は遲疑（ちぎ）なく一任して、機の善惡をかえりみず、不捨（ふしゃ）の誓約を仰ぐばかりに候えば、機情の煩惱も妄念も、歡喜の念の厚薄も、懈怠もそのまま打ち捨てて、唯願力不思議を御愛樂なさるべく候。

……、過日来御病氣にかからせられ候由、御老体、ことに大暑中、御苦惱の程、察し奉り候。

法然上人は、淨土を願う行人は病患を得てひとえにこれをたのしむと仰せられ候えども、中興蓮如上人はあながちに喜ぶところのおこらぬ事を恥じ入り給う由仰せられ候。

貴兄、いかにいらせられ候や。若し病にせまられてお喜びも、御懈怠にあらせられ候えば、何卒中興上人の御恩召

を仰おぎ、この喜ぶべき大恩を病苦に障えられ、喜ばれぬ

ような者を願力の御正機（おめあて）とは、実にありがたき仕合せと、御恩に立ちかえり、御報謝のお称名ご相続なされたく候。

平生すら煩惱のためには御報謝をさまたげられおるものなり。まして病中は万事宜のままならぬについては、いよいよ貪瞋きそい起り候ものなり。しかれどもこれを憂うるにおよばず候えば、起る煩惱はおこらせおいて、いよいよ大悲の御正客たることを喜び、唯仏恩の広大なることを念じ、お称名御相続なされたく候云々。

明治廿五年七月廿九日 七里恒順 拜

醍醐御老院様



住田智見師聞書

中島彰悟

日本の高僧伝に親鸞聖人の名がのっていない。それほど世にかくれた御一生であつた。大地の水が不断に湧き出でて人のいのちをうるおすように、満九十年の御生活はみな私共に仏の真心を伝えて下されたのである。口先上手位で人が救えると思うのは大間違ひである。

すべて人間は生きている間に世に知られるような人は死と共に忘れられる。宗祖は七百年の今日ます／＼人の敬慕を深めているのには驚くばかりである。彼のドイツのバルトも絶大の讃美をしている。

宗門の現状は形のみで生命を失っているのではない。あまり大きくなると駄目だ。鹿は角が立派にのびると、いろいろのものにひっかかって遂に捕えられる。

堂班のこと、五色の衣などの話が出たら、それは必ず捨てねばならぬものとして、形にとらわれずにつまらぬものであるとして用いておればよいと排斥はせられなんだ。

真宗の仏様は、有神論か無神論かとおたずねしたら、一言のもとに、それは有神無神を超越したる不可思議光仏である。不可思議とはわからんということではない、御徳が広大で思慮の及ばぬことである。

こちらから仏を理想として進むのは自力の願生者。それでは何時までたっても安心出来るきずかいはない。逃げる私を、仏が追いつめであることに驚かねばならん。

信よりすすめると、御廻向の品を頂くことを忘れる。念仏は病人のためのお粥であるから、これを喰べながらこれをお恵み下さるみ親のお慈悲をよろこび、本願におさめられるのである。

「称我名字と願じつつ」と云う時は、我^{われ}という字に気もつけよ。どういふ仏であるかと、仏願に目をつけ「汝の親であるぞ、母と呼べ」とあるお慈悲をいただくのである。

○ 法然上人は戒律主義の皮を破り親鸞聖人は剛信を示す。戒を破って来る信仰は肅然として生ける戒を生む。仏天は照々たり、蓮如上人の御聞書はこれである。

○ 仏の三不能（仏とはここでは釈尊）

一、因果の道理を相違させること。

二、無縁の者を救うこと。

三、一切衆生助け尽すこと。

これは景德伝灯録に出ている。

如に順ずるから三不能となる。全智全能の説は科学の敵である。仏教は科学が進歩すればする程光を放つてあろう。

○ 念仏往生の願だけではない。誓願であるから「汝助けるまでは後へ引かん」の誓がある。誓のある行は念仏だけである。

○ 仏の本願を聞かせぬ者は地獄や極楽のわかる気ずかない。

地獄と極楽を一処にして無いと云うが、それは間違っている。地獄は自分に造つている、自業自得である。極楽は願力成就の報土である。信心の智慧をうると、地獄も極楽

夫さを聞け。

○ 念仏往生とは如来の方から助くる道をあけて、我名称えよ必ず救うと、先手かけての呼び声である。そのお念仏をとなえてまいることである。

○ 歎異抄は戒律主義を破って強く信を勧め、御一代聞書は信より出る無戒の戒を御教化である。

○ 「三宝によらずんば何によりてか枉（まが）れるを直うせん」と聖徳太子の申されたは、仏心をうけると光明に照らされて足許が見えるようになり、内省が深まるからそう仰せられたのである。

○ 安芸の弥平同行は、麴（こうじ）を計りつつ「見てござる、見てござる」と云って念仏した。国家の復興もここからでなければならぬ。

○ 「大行とは無碍光如来の御名を称するなり」とある。されば、無碍の願心を信じて称えるが当然である。御名というだけではない、無碍光如来と云うことを深く味わって称えねばならぬ。

もうなずけるようになる。

○ ひとり静かに毎日仏前で念仏しつつ十分間位でよいから三業を反省することを続けよ。

○ 如何にして信ずるか、自分から信心を起そうとしているが、それは駄目である。足べしふんで天に登らんとあせるのと等しいことである。いままでも駄目であるから、仏が我が傍まで降りて来て、われをたのめと久遠劫来呼びずめである。このいわれに氣つくのが名号のいわれを聞くことである。

○ 自力のはからいをしていっていると氣がついたら、この自力は間に合いそうなか否かを考えてみよ。

○ 五劫思惟は誰がためであるか、なぜかくまでながくかつたかをよくよく味合ってみよ。

○ 唯可信斯高僧説と、かかる人々（七高僧方）が高僧であると知ると共に、斯説は誠であるから必ずうけ入れると云う心にならぬと念仏行者とはならぬ。高僧の説を信ぜねばならぬ。

○ 信心は如来の決定心から発起す。如来の御手まわしの丈

○ 心光に照らされるとは、仏の心と凡夫の心とびつたり合うことである。

○ 南無阿弥陀仏に連れられて今度は詣らせていただくのである。

○ 御文に「五濁惡世の衆生というは一切我等女人惡人のことなり」とあり。

銘文に「十方衆生というは我等のことなり」とある。

これは容易ならぬことである。御本願の目当が私のためであったとの驚きである。

○ 観音経には「我を念ぜん」とせば本師の弥陀を念ぜよ」とある。世には観音の像を床の間にかける人が多い、又像を尊む人も多い。されど本師の弥陀を念ずる人がすくない。

○ 機の深信は自力無功を信ずる心。自分は悪いと思わねばならんとするから間違いがおこる。

我が身が悪いと思っているだけなら機の深信ではない。その裏に善くしたいと云う心があるから。

機の深信とは、我心は善くならぬ、役に立たたぬと我が

心を見限ることで、法が知れねば機も知られない。兩者共に仏から知らせて貰うことである。

成就文の一念は信の一念。附屬文の一念は行の一念。これは聖人独特の發揮で、信の一念を示して観念を打破し、行の一念を示して遍数の多少を破したまう。

ひとりで御浄土へ行くつもりであると、いくら聞いても安心は出来ぬ。生きている時から仏様と二人連れである。

(註) 一人でも行かねばならぬ旅なるを弥陀にひかれて行くぞ嬉しき
蓮如上人詠

自然虚無の身、無極の体と云うことは、真如の理そのままの身ということ。

宿縁がないとは、自分から云うことではない。自分から近づく縁はないのである。

法然上人門下で、還相をよろこびたまうたのは宗祖御一人。御晩年には特に、この感が深かった。一面また浄土の

頂上も直ぐ隣である。大願に乗托すれば仏は枕辺に、見ていさる／＼となる。

十劫成仏の弥陀か、久遠実成の弥陀如来か。それは教行信証の上では明らかでないが、御晩年はます／＼御反省が深まらせられ、曠劫流転の久しきを思い浮べて、十劫以来の御憐みくらいではない、これは久遠劫来の善巧の方便があればこそと、久遠の弥陀をあこがれたまうこととなったのである。

現今は念仏の法にはぐれ、そして仏を追いかけている。したがって不安とさみしさにおかれ、再び観念的となり安心は元祖、宗祖の前に逆転している。

わが身の罪悪を知るだけなら、自殺か自棄となるだけ。光明の御照しをうけて、我身の浅間しさが知れ、自力のすたったのが機の深信である。

今の人間は、生きるために働くというが、なぜ生きねば

三尊(弥陀、観音、勢至)がこの生死海に出て、救いの大活動をなしたまうことを深く感じられている。

不断煩惱得涅槃を蓮師は現益(現実に得られる利益)とせられた。この気持は、煩惱の中にも安心しておられること。維摩経には「火中に蓮華を生ず」とある。

機の上の三信とは

至心……悪いことが悪いと知られる。

信樂……御助けが疑いなく信ぜられる。

欲生……決定成仏の思い。

本願の三心は如来の真実の三面である。されば、名号のいわれを聞くということは、如来の真実のお慈悲をうけること。

釈尊の上に働きを願した如来を、どうにかして人類に信知せしめようと、自信教人信するが真宗で、釈尊の人格につき、教法の理観におちたが他宗である。

蟻が富士山に登ろうとすれば十億億土、飛行機で行けば

ならんかを考える人はない。

白雲亭巨海師(中根山の庵に閑居)の詠歌に

とう人もとわるる人もなく鹿の声のみぞ聞く柴の下庵
よしあしを云うや言の葉ふしあらんなにはともあれ
だ南無阿弥陀仏

山深くいざなわれけり春風の吹きこす峰の花のかおりに。

巨海師を常に先生は追慕せられた。

歎異抄の終りに、死罪四人、流罪七人の名が記されてあるのは如何なるわけかとお尋ね申したら、
「それはこの法門はかくあまたの人が身を捨てて弘めなされたのであるから、聞く人また不惜身命で求法せねばならぬ道理をしらしめんためである」と。



歌集「白蓮」抄

筑紫野春草

(註) 著者、春草、古稀の記念に本集を出版、その月の二十六日に死去されました。柳瀬留治記

涅槃

年老いて我があとを嗣ぐ者あらぬそのさびしさは云ふべくもなし

あはれあはれいまだ来らぬ明日をうれへ過ぎし昨日を悔ゆる愚かさ

すべて非なりと否定しつくしなほそこにいささか残せりうぬほれこころ

屈折

今日をも知れぬ命と覚悟ありながらいささかのことに腹立ちいかる

は

信ずとはいささかごとに腹立ちの起る醜き身と知ることぞ

愚昧

母逝きて三十年になりわれは老いとしき孫も人となりたり

邪見憍慢愚昧ほかのなに者ぞ今こそ知れりわれと云ふもの

母逝きて三十年に得たるもの邪見憍慢のわれなりちふこと

竹柏

一里あまりの道に汗かき疲れはてて帰り来たれと言ふ人もなし

誰も知らぬなげきを一人かみしめてベタル踏み帰る蓮

喘ぎのぼる頂きまでの屈折の苦楽にあるや山のたのしみ

如実知見の智慧賜りて見きはめむ煩惱具足の現実の自己を

去る者を追ふならねども時折に思ひ見るなり親しかりし日

夏安居(げあんご)

繰り返し細かに説かす聖人の自然法爾章聞けどもあかず

信心

信あれば怒り腹立たきものと決め居ることし、大方の者

華咲く路

み仏のみそなはします身の上を何かなげかむ南無阿弥陀仏

カレンダーを今朝も一枚めぐり捨つ、ほろにがき悔のしこりと共に

老耄

七十年何をなせしとみづからに問ひつむれどもさて答へ得ず

自然法爾のそのみ光に酔ひしれて外道の歌を放將に叫ぶ

このことは伝へ置きたしと我孫に思ひ居ること二三にあらず

ゆきづまりの困憊の果てに解き得たるかの一ことは今

も忘れず

あれもこれもはかなく消えぬ彼も我もさびし老いぬす
べなきまきに

白 蓮

台風の迫るぎざしの強風にゆらぎにゆらぐ白蓮の花

朝風にゆらぐま白き蓮の花清きかほりをまきちらしつ
つ

こほろぎ

秋深しここを先途とこほろぎの鳴きすぎふなり夜風と
なく

頑 固

そうですかと素直に受くることのなし一言居士か我も
然れど

己れ正しく清しときめてゐることとく忠言を聞かず我も

然れど

うなづきて聞きあるものの如くして少しも聞きあらず我
も然れど

どうせせねばならぬことなら初めよりころよく受け
よ我も然れど

草 原 社

我が想像といたく違へど崖に建つ代々木五の一短歌草
原社

あわれ我もいよいよ爺か双手をば後に組みてよろけけ
くさま

慈しみいや溢れたり師のみ歌気むづかしき私の胸にし
ひびく

浮ける垢汲みすてながら念仏しつつ髪洗ひます師の姿
見ゆ

ねずみもちの花の白きにまぎれつつ集ひより来るもん
しろ蝶ら

花の香に誘はれてかく集ふものかあまたむれたりもん
白蝶ら

巻末記本集「白蓮」は昭和四十年三月より昭和四十四年九月ま
での作品を集めた。正月みなが集つた時、古稀の祝は私等でやり
ませうと言うてくれ歌集出版のこと編集、校正も受持つてくれた
ので皆にまかせきりである。有難いことである。

来年は小生住職拜命以来五十年になる。本山で特別待遇をす
るとか聞いているので大いに楽しみにしていたが、さて昨今の様
四大不調を来して居れば来年どころか、今年の秋の母の三十三回
忌に会えるかどうかと案ぜられてならない。「人生七十古来稀」、



本願成就文(三)

花田正夫

いよ／＼中心の十八願の成就文をいただきます。先ず十八願の文は、

設(たと)い我仏を得んに、十方の衆生、至心に信樂して我が国に生れんと欲し、乃至十念せん。若し生れずば正覺を取らじ、唯五逆と正法を誹謗せんとをば除かん。

(意訳)

もしわたしが仏になったとき、あらゆる人々が、心から信じ喜び、往生安堵のおもいより、ただ念仏して、わたしの国に生まれることができないようなら、私は決して仏とはならない。ただし、五逆の罪を犯したり正法を謗つたりするものは除かれる。

次に成就文は、

諸有の衆生、其の名号を聞きて、信心歡喜し、乃至一念せん。至心に廻向したまえり、彼の国に生れんと願すれば、即ち往生を得、不退転に住せん。唯五逆と正法を誹謗せんとを除く。

(意訳)

弥陀仏の名号であります。

「聞く」とは「衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心有ることなし。これを聞と曰うなり」と聖人が説かれています。

仏の本願の生起とは、

如来の作願をたずぬれば苦悩の有情をすてずして廻向を首としたまいて大悲心をば成就せり

とありますように、煩惱具足の身として、罪業の重さに沈みきつて浮ぶ瀬のない私共を仏かねてしろしめして、その者を光明界に導き入れ、成仏せしめずばやまじとの本願であります。医師は病人があるから、この病苦をいやすためにあらわれたので、医師があつて病人があるのではなく、病人が現存するから医師が出現したのであります。

しかし、医師には力に限界があり、かつ報酬なしでは出来ないことでありますが、仏の本願は、私共が自分の愚悪さに気づかぬ前からこれを知り尽くされて、こちらから求めぬ先から救いの御手をさしのべて下さるので、私共の世界にはあり得ぬ、不可思議な御慈悲であります。

ゲエテは、「觀察の書」に

人は言う、ガチョウは愚なりと

おゝ、かゝる人の言を信ずるなかれ

ガチョウは振返りて助言を与うることあり

人の世にありてはしからず、

すべての人々は、その名号のいわれを聞いて、よく一念の淨信をおこして歡喜し、あらゆる善根のおさまつている功德を与えられたことを喜んで、無量壽国に生まれようと願うならば、願いのままにみな往生し、不退転を得て、ついに無上のさとりを開くことができる。ただし、無間地獄におちる五逆の罪を犯したり、正法および聖者を謗つたりするものは除かれる。とあります。

諸有の衆生

成就文に諸有とはあらゆる衆生で、老少善惡をえらばれぬのであります。本願文に十方衆生とありますのは東西南北の民族や国境のへだてのないことであります。

諸有とありますには今一つの意味があります。それは仏教で有(う)とは迷いで、廿五有とか三有(欲界、色界、無色界)と分類してありますが、あらゆる迷界の衆生の救済をめあてとせられてのお喚びかけであります。

其の名号を聞きて

「其」とは、第十七願が成就して諸仏の讃歎される南無阿

人みな前に急ぎで、つまずき倒るるものもあるも

ひとりとして振り返るものなし

とも、更にきびしく「ヘルマンとドロテア」に

隣の人が不幸に襲われれば大口あいて喜んでいる

恐ろしい火の手が上ると、それと皆駈け出す

痛ましや、哀れな罪人が刑場にひかれて行くと聞くと

みな見に出かける

今日も今日とて、罪もない避難民の気の毒な様を見に

みな遊山みたいに出かけるのです。

同じ運命が、すぐとは言わないまでも

いずれは自分の上を見舞うことを考える者はない

こうした浮わつた気もちは、悲しいことであるが、

やはり人間の持ち前ですなあ！

とは、省みていなむことの出来ぬことでありますが、この故に弥陀仏の本願の不思議が成就して、名号とあらわれて下さるのであります。

御名の不思議

すくなくとも日本に生をうけたものは、南無阿弥陀仏の御名を耳にし、口にしないものはないであります。然し御名に対する考え方は千差万別でありまして、讃否まちまちであります。池山先生は肯定的に聞く人々を、一、念仏もいい。

二、念仏が一番よい。

三、念仏でなくちやいけないのである。

と三種に分けられ、早く第三の味わいを得るようにと勧められました。

蓮如上人は御文五帖目(十一、十三通合様)

南無阿弥陀仏の六の字のころを、よくしりたるをもて信心決定すというなり。

そもそも信心の体というは、経にいわく、聞其名号信心歡喜といえり。

善導のいわく、南無というは帰命、またこれ發願廻向の義なり、阿弥陀仏というは、すなわちその行といえり。

南無という二字のころは、我等ごときの惡業煩惱の身なりというとももろもろの難行をすてうたがいなく一心一向に阿弥陀仏をたのみたてまつるころなり。

發願廻向というは、一念に弥陀をたのむ衆生に無上大利の功徳をあたえたまうなり。

さて阿弥陀仏という四つの字のころは、一心に弥陀に帰命する衆生を、ようもなくたすけたまえるいわれが、すなわち阿弥陀仏の四つの字のころなり云々。

とお勧め下さっているが、蓮如上人御一代の御勸化もここ一つにあったと信知しております。

煩惱熾盛、罪業深重の身とて、いずれの行にても生死の

生にさつま芋のお土産とは」とうわさし、嘲笑の色が見えました時、翁は側近の人々を叱って「お前方は桐野のくれた芋だけを見てあざけているが、彼としてはあれが精一杯であるが若し百両あれば、そのままのころすくれる、否、いのちまでも差し出す人間だ。その心がわからぬか……」と詰められたと云うことであります。

次に、もうずっと前の話でありますが、阪大の入院患者が是非来てくれとのことで、病室を訪ねますと、十六才ばかりの少年がしきりにお念仏を喜んでいましたので、私も心やすくなって、そのいきさつをたずねますと、看護していた祖母が、

『永い病で孫が苦しみ、段々病勢がすすむにつけ、この孫に、私のかねてからお聞きしていましたお念仏を手渡してやりたいと色々考えた挙句「今日からお念仏を一緒に申そう、そしてその称えた数だけのお米でお粥を作っておあげるから」と勧めますと、不思議にも素直に聞いてくれましたので、私は嬉しくて、一緒に念仏しては一粒一粒とお米をより出してお粥を作っておりました。その数日のちでした、孫が申しますのに「お祖母さん、よくわかりました。お祖母さんの私のことを心配して下さいるころがわかりました。もうそんなことをして下さらなくても、ありがたいお念仏を申してまいりますから」と

苦海を離れることの出来ない私共を悲憫されて、阿弥陀仏とあらわれて下さり「われをたのめ、かならず救う」と切々とした悲心をもてお呼びかけ下さる、そのおまことを頂いて南無阿弥陀仏と申すばかりであります。

近角先生は、明遍僧都の故事から「お粥の念仏」とも、「お慈悲の念仏」とも言われました。重病人の何一つ消化する力のない者を救い遂げようとお粥いずれの行も及び難い者への、お慈悲のお念仏であります。

近角先生はまた「我々は物を貰うて喜ぶけれど、物のよしあしでなく下さる人のころざしを受けねばならぬ」とよく仰言ったと伝聞いたしますが、私共が、南無阿弥陀仏の名号を聞く時に、特にこのことが大切であります。それにつけて、西郷翁と桐野利秋との出合いを思い出します。桐野は百姓の子でありましたが西郷翁をしたいお願いして弟子入りを許されました。その挨拶に出掛けましたが貧農の子とて、お土産をととのえることが出来ず、畑で出来たさつま芋の味のよいのを持参しました。その時翁は「わしは薩摩の生れでこの芋が一番の好物だ、ありがとう」ところよく受けとられました。桐野はその翁の心に初めて接し、その刹那に、この人とは生死を共にして悔いることはない、と深く心が定まつたのです。ところが、翁を取りまいていた他の人々が、桐野をあざけて「西郷先

喜んでくれました。それからお念仏を喜んでいられる方にお会いしたいと頼みますので御無理を申しました」とのことでした。

この病人は、死を前にして、祖母を通じて仏のおまことに気づき、念仏者となつたのでした。その少年の喜びの姿が私の心にあり／＼と刻まれております。これが名号のいわれを聞きとった、年は若い私のよい先達であります。

信心歡喜乃至一念

名号のいわれ、本願の大悲は、地獄一定の私のためであったと、仏のおまことに気づき、あゝありがたいことよ南無阿弥陀仏と称えましようとなって、その事がまだ口に出ない、まえに大いなる仏心におさめられて、二度とはぐれることのない身とさせて下さるのであります。

ここで「乃至一念」と仰言るところに、極く短命の者、障り多い者をももらさじとの深く広い仏心の大悲を仰いでおります。近角先生の歎異鈔の講話に実例をあげておられます。それに

「数日に前にも發狂し、絶食して心臓麻痺で亡くなられた憐むべき人があった、其人の近親が信仰家であったために臨終に及びて力をこめて如来の御慈悲を説いて聞かせ、唯念仏せよと勧めたに、口を指して称えることが出来ぬということを知らした。然らば私が称える故にその心持になりたまえというて、其人を抱き、頂に接して

念仏しつゝある間に、頭をうなづき、心中大いに喜びて
久しからず亡くなられたとの事である云々」

と、一声の称名する力のない者も、往生出来ることを実
地に教えられました。

又、大分県の酒井幽演師の遺稿に、病苦がせまり、死が
迫った時、

病みつかれ 一名一声もとなえ得ず

弘誓のみむねいよいよ尊し

と讃仰して逝されました。

無常迅速、今日あって明日を知らず、出る息入る息を待
たず、と教えられながらも、馬耳東風と聞き流して、何時
までも死なぬ積りでおります私には、乃至一念とまでお誓
い下さった、水も漏らさぬ大悲の程も上の空に聞き勝ちで
ありますが、このように身勝手な煩惱の幻影に惑溺する私
をみそなわす仏の御心には、乃至一念とまで仰言らずには
いられない、実にありがたいことであります。口伝抄に、

「如来の大悲、短命の根機を本としたまえり、もし多念
をもて本願とせば、いのち一刹那につずまる無常迅速の
機いかでか本願に乗すべきや。されば真宗の肝要、一念
往生をもて洵源とす云々」

とありますが、仏は悪人愚人をことに憐れんで下さると共
に、短命の障り多き身をことに悲憫して下さるのであり

ます。

至心に廻向したまえり

ここは聖人の独特な訓み方であります。昔から眼光紙背
に徹するとはこのことであります。

私共は自分の力をたのみとして、善根功德を積み、それ
をこちらから廻向して成仏しようと願うのが一般の仏法者
の歩みであります。差し出す何物もない底下の凡愚と自
照される時、その扉は永遠に塞ざれるのであります。

法然上人が十五から四十三まで三十五年の学問修行の挙
句に、この大きな壁につきあたられ、あとで聖覚法印に告
げられた言葉に、

「法相、三論、天台、華嚴、真言、仏心の諸大乘の宗、
あまねく学し、悉く明るに、入門は異なりといえども、
皆仏性の一理を悟顕することを明す。所詮は一致なり。法
は深妙なりといえども、我が機すべて及び難し。經典を
披覽するに、その智最も愚なり。行法を修習するに、そ
の心ひるがえってくらし。朝、朝に定めて悪趣に沈ま
んことを恐怖す、夕、夕に出離の縁の欠けたることを
悲歎す。忙々たる恨には渡に船を失うが如し。朦々（も
う／＼）たる憂には闇に道に迷うがごとし云々」
とあり、また親鸞聖人は歎異抄の三章に

「煩惱具足のわれらはいずれの行にても生死をはなるる
ことあるべからざる云々」

とあり、聖人八十五から述べられた正像末和讃には

自力聖道の菩提心 ころもことばもおよばれず

常没流転の凡愚は いかでか發起せしむべき
とあります。

さて、法然上人は、十悪、五逆の下機（劣る者）の救い
に御自身を見出され、「無量寿仏のみ名を称えよ」の一句
に光明を感得され、親鸞聖人もまた「いずれの行も及び難
き地獄一定」の身を、かねてしろしめして、「煩惱具足の
凡夫」と仰せられる本願のたのもしさを慶喜されました。
七高僧方も皆同じ体験を持たれております。

聖人はこの御体験と遠く三国七高僧の論釈に基づき、智
目、行足のない身、たすかるよすがの絶えてない者に、仏
力を加えて下さるご真実を「至心に廻向したまえり」とお
訓みになったのであります。白杵祖山先生はよく、「恵み
によつてめぐみをいただく」と讃えられました。

さてここに、従来の仏教者のこちらから廻向する道は大
転換されて、如来から私共に御廻向下さる、他力の大道が
あきらかにされたのであります。才市同行のうたに

わたしのころがあなたのころ

あなたのころがわたしのころ

わたしがあなたになるのじやないが

あなたがわたしになるころ

と、心にくいまでによくたたえております。

彼国に生れんと願すれば

浄土を願生することは、初回に「彼国に生れんとする者
は」のところ述べてましたように、仏の願力一つに導かれ
て、西方浄土を願う身にさせて下さるのであります。それ
は迷ひ児の耳に、母の喚び声がとどくと同じで、そのまん
ま「お母さん」と叫んでそのふところに帰る如くでありま
す。

即ち往生を得、不退転に住せん

往生について、心往生と身往生を分けてありますが、こ
こでは仏のおまことを頂くなりに、その時、その場で、必
ず浄土に生れ、成仏させて頂ける身にさだまる心往生の意
味であります。その保証は、撰取して捨てたまわぬめぐみ
によります。

聖人は、撰取不捨の故に正定聚（仏道において不退転の
人々）に住す、とも云われております。歎異抄の九章には
「よろこぶころもなく、いそぎ浄土にまいりたき心なき
ものを、かねてしろしめして、ことに憐みたまう」本願の

摂取の御手のたのもしさを、煩惱具足、煩惱興盛の身に知らせて下さるのであります。又歎異抄十三章では、兎の毛、羊の毛のさきにいる塵ばかりも、つくる罪の宿業と示されて、その微塵のすみ／＼まで照護下さる、摂取の御手の廣大無辺さを知らされます。

西遊記の中に、孫悟空が或日、空中を飛んで何日かして地におりてみると、仏の大きな手掌の中で僅か指の一節ほど移動したにすぎなかったと知り、仏のみ手から出られないという一節がありますが、そこに摂取不捨の不思議さを味わうのであります。

さて、不退転に住す、とは、仏法者にとって、無上のよろこびであります。菩薩のさとりに入ったはじめに、王の子が、自分はまだ王ではないが、必ず王の位につくことが出来ると喜ぶように、初地の菩薩もまた仏になれることを歡ぶのであります。本願念仏を聞信する者もおなじよろこびであると聖人は信の上の徳を随喜しておられます。聖人はさらに、菩薩の第八の位、不動地の境界になぞらえて、仏力に照護される者は、金剛心を恵まれ、火にも焼けず、水にも侵されぬとも仰言っています。更に、その成仏の速

の一節に、私の正体を言いあてられているのに驚き「唯除く」とまで仰言って下さるのも、このような私のためであったといただきはじめました。

福島先生は、「ただ可愛いだけでは甘えてしまうが、除くとまで仰言って下さるお蔭で、自分の姿にめざめさせられる」とも、また「五逆、謗法の者が一番氣にかかる、との思召しである」と味っておられました。

これ、嚴父としての釈尊のお叱りであり、それあってはじめて悲母としての弥陀仏のみこころに帰らせて頂けるのであります。

この最後の一句は、放縱主義の惡無碍な横着心では通られぬ誠めであり、律法主義の賢善者の遠慮心では行き詰るところであります。悲しいことには夢中夢と知れず、狂人に狂と氣つき得ぬように、五逆、謗法の自分でありながら、それにめざめず、はてしないまよいの苦海から出られぬ者だから、「唯除く」ときびしく呼びさまして下さいるのであります。臼杵祖山先生の御遺詠を掲げて結びます。

唯除五逆誹謗正法の經文を仰ぎて

除かるる身にしあれども御仏の

さにおいて今生のいのち終るなりに成就されるので、補処の彌勒菩薩とも等しいとよろこばれております。

人間に生れ、本願を聞く、そこに、私共の一切の願いが満たされ、我と我等のすくい之道もおのずからひらけるのであります。

唯五逆と正法を誹謗する者を除く

五逆の者とは、父を殺し、母を殺し、和合僧を破り、仏身から血を流すという、ひどい罪人ですが、省みれば私自身その通りであります。しかし次の正法を誹謗する者となるが、私は幸に仏縁に恵まれて、仏法を讃仰しているからそれではないと長い間ひとりぎめしておりました。ところがある機縁から、自分は尊い仏法を信じているという慢心から、他を見下し、われよしとしている自分を照らし出され、仏法が一番よい、仏法にかぎると思っているまんまが、仏法を鉄鉋にしていることに気づき、誹謗者こそ私のことであるとなりますと同時に、歎異抄十二章に、「わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりなりというほどに、法敵もいできたり、謗法もおこるなり。これしかしながらみずからわが法を破謗するにあらずや」

救いたまえるめぐみ尊とし

さからいとそしりの外になき我に

順いまもる御名の尊とさ

(昭和二年四月十四日未明祖山)

徒然草

(八十四段)

法顯三蔵の、天竺にわたりて、故郷(中国)の扇を見てはかなしび、病にふしては漢の食(じき)をねがいたまいけることを聞きて

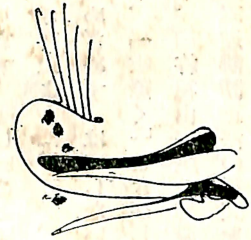
「さばかりの人の、無下にこそこころよわき氣色を人の國にてみえ給いけれ」

と人の云いしに、弘融僧都、

「優に情ありける三蔵かな!」

と云いたりしこそ法師のようにも非ず心にくく覚えしか

あとがき



三、親と子のかなしみ、四、アメリカ

の仏たち

五、仏教と死および自殺

著者「あとがき」

……わたしが、これらの原稿を送りましたのは昨年の初夏でありました。しかし、これら、これらの校正刷を手にしてみて、あらためて「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよはずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに」のおことばが痛切に身にしみます。

長い残暑もすぎ秋が訪ずれ、郊外の恋しい頃となりました。然し知人で重病の方も多く、また計音を度々きかされ今更に驚いております。若くて健康な時は、ひとごととして聞き流しておりましたが、身にしむ年となりました。この時、七里恒順師の見舞文を和上の語録から抄出しました。住田智見先生の聞書は、中島彰悟師著「光沢抄」から頂きました。彰悟師は住田先生を一筋にお慕いになり、尾西市の御自坊で有縁の人々と修道会を長年つづけられた篤信の師であります。

歎異抄の世界

西元 宗助

定価、八百円、振替東京四九八七。

発行所 東京都杉並区西荻南一三三六、

教育新潮社

八目次ⅴ一、凡人の仏教 二、光と闇と

じつは昨年の暮、一人息子を実如として失いました。そしてわたくしの立つている地盤がガラガラと崩れ、ただ取り乱すばかりでありました。どうにもなりません。ただ南無阿彌陀仏となつて俱にあることが思われます。息子をよく知りました。先生は、私どものための捨身菩薩であつたのではなく、いかといつて、さとし慰めて下さいます。また畏敬する先生は、雪山童子の如くにあつたといつて惜しみ慰めて下さいます。……彼がこの世に生きていたときよりももつと切実に純粹に生きて、わたくしを、わたくしたち一家を支えているようでありました。わたくしはこの子の童魂に導かれて初心にたちかえり、時代の業火のなかに、ただ前進したいと念じるばかりでありました。底知れぬ悲しみの心を抱いて。

御案内

○毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。

一道会例会。市電、新郊通二丁目下車。

○毎月二十四日、午前午後、

教西寺法話会。市電、御器所通り、市バ

ス、北山下車。

定価 半年 二百五十円（送共）
一年 五百円（送共）

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫
電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八
発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番
郵便番号 四五七

慈光第二十二巻 第九号 昭和四十五年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可